

その生涯を桜に捧げた男

平成 20 年 4 月 3 日

みはた会 伊室 一義

桜は日本を代表する花であり、私たちは幼いときから強い愛着心を抱いているが、では、「どれだけ桜のことを知っているか？」となると、これが若干怪しいのである。早い話が、「知っている桜の名前は…？」と数えてみると、大凡のレベルが分かっていうもの、「ソメイヨシノにヤエザクラ、シダレザクラに…エー…とエー…と」となって、5つまで言えれば良い方で、10以上も挙げられる人など滅多にお目に掛かれるものではない。

しかし、日本の桜はヤマザクラなど10種類を基本に、変化したものを含めると100種類が野生し、園芸用に育成されたものを入れると300種類以上に達するというから、私たちは桜のことを殆ど知らないことになる。こう考えてみると、私も桜について丁寧に教えてもらった覚えはないし、桜の種類についてはほとんど関心がなかった。まして名桜・巨桜といわれる大事な桜がどんどん少なくなっているなんて、全然知らなかった。

ところが「それはソメイヨシノのせいでもある」と言う人がいるのを知り強いショックを受けたのである。笹部新太郎(1887~1978)、在野の桜博士といわれ、日本の優れた桜を守ってその生涯と全財産を捧げたこの人を偲びつつ、桜に関する理解を深めるのは、あながちムダ花ではないと私は思うのである。

★諸悪の根源はソメイヨシノ

元々ソメイヨシノは、江戸末期に江戸染井村の植木屋がオオシマザクラとエドヒガンを交配させて造り出したもの。最初は吉野桜という名前で売り出そうとしたが、「吉野山のヤマザクラと紛らわしい」と非難されて、ソメイヨシノとしたのだった。花だけが先に咲くので非常に華やかに見えるが、気品に乏しく、とくに花が散った後、^{がく}萼が垂れ下がる様が美しくないと心ある人に嫌われていた。これが日本の桜の約90%を占めて日本列島を覆うようになったのは、「悪貨が良貨を駆逐する」グレシャムの法則通り、根付きが良く病虫害にも強いので管理しやすいのと、中央集権の明治政府と学会がこのソメイヨシノを普及させたからである。とくに東大教授三好 学博士が推薦し、政府が通達まで出して徹底を図ったので、公園も学校も兵営もみんなソメイヨシノで埋め尽くされることになり、嘆かわしいことには、各地の優れたヤマザクラが切り倒されて、ソメイヨシノにとって替わられたりした。

「これでは日本の良い桜は消えてしまう」と立ち上がったのが笹部新太郎さんであった。笹部さんは明治20年大阪堂島生まれ、東京大学法学部在学中から桜に情熱を抱き、名桜の保存と桜の品種改良に寝食を忘れて取り組んだ人である。厳父浅吉さんから「本心の命ずる如くに生きよ。禄のために頭を下げる必要なし」と教えられ、一切の外職に就かず、家

産を継いで桜の研究で世の中のためにお役に立とうとしたのだった。宝塚に70万㎡の演習林と1万㎡の苗圃^{びょうほ}を持ち、手掛けた実生^{みしょう}（種から木になるまで育てる）の数は60万本といわれるから生半可な園芸家ではない。また、この人は人一倍の熱血漢で、歯^{きぬ}に衣着せず口を極めて学者や役人を非難したので、共鳴する人もいたが苗圃を枯らされるなど意地悪もされ、総じて報われることが少なかった。しかし、私はこの人に限りなき共感を覚える。「花に先立ち萌え出づる嫩葉^{わかば}の美しさと花の調和にこそ、真の桜の優美さがある」という笹部さんの説に、私は満腔の賛意を表したい。



(福祿寿)

★笹部さんが後世に残してくれたもの

昔から「桜切る馬鹿梅切らぬ馬鹿」という諺もあり桜の木は案外弱い樹で、ほぼ50年で成長はぴたりと止まってしまい、それから先は自分の力次第という。ところで、桜の国日本には風雪に耐え、自らの驚異的な生命力により長寿を保っている桜が沢山ある。笹部さんは文献をもとに全国各地を実地に調査して回り、膨大な資料を作り上げたのである。また偶然未登録の隠れた名桜を発見して心をときめかず調査行もあった。琵琶湖北岸弁慶ゆかりの海津町の共同墓地で見つけたヒガンザクラの巨木は、大崎十一面観音様のご利益ではないかと随喜の涙を流すのである。

さて、長生きする桜にはその生命力、気候土質、水分や管理など長寿を保つだけの要素は備わっており、笹部さんはそこから貴重な教訓や情報を蓄積した。さらにこの人は名桜・巨桜の接穂^{つぎほ}を貰^{たけだお}ってきて武田尾にある演習林で接ぎ木し、またこれはと思う桜の種を貰い受け、これを京都向日町の苗圃^{むこう}で育て上げたのである。笹部さんの偉いところは、この丹精した桜の苗を希望する人に無料で提供したところで、有名な大阪造幣局の「通り抜け」、奈良公園、吉野山、岐阜県根尾村、湯の山、樫原神宮、江若^{こうじゃく}沿線、夙川^{しゅくがわ}などとその提供

先は数え切れないが、同時に、この人は単なる思いつきや売名で桜を植えようとする人に対しては、これを鋭く見破り、厳しく拒否した。そのため笹部さんを変人呼ばわりして、^あ悪^{ざま}様に言う人も少なくなかった。しかし、「桜は好奇心だけで植えるものじゃない。後々の面倒が見られないなら植えるべきではない」というのがこの人の信条であった。

さて、何とんでもこの人が後世に残した偉業の圧巻は、^{みほろ}御母衣ダムの湖底に沈む運命にあった樹齢400年のウバヒガンザクラを救ったことだろう。電源開発の初代総裁高碕達之助さんの真情に^{ほど}絆^されて、高名な植物学者や専門家たちが匙^{さじ}を投げた老樹の移植に敢然と立ち向かったのだった。失敗すれば信用失墜となるこの局面、笹部さんは桜に捧げてきた人生の意義をこの移植に賭けたのだった。時々テレビにも紹介される御母衣ダム^{しょうかわ}庄川村の巨桜は、今年も白雲を巻き起こして咲き続け、「その人生を桜に捧げた男、笹部新太郎」の真骨頂を示している。

そしてこの人が最後に残したのは、八重咲きの新種「笹部桜」である。①苗木の成長が早いこと、②風雪など天災に耐えうること、③喬木・巨木に成長する可能性があること、④花期に遅れぬこと、⑤花に気品があること、⑥嫩葉の色、葉の形が良いこと。

この6条件を満たす「笹部桜」は、分類学や理屈だけの桜博士には絶対に実現できない実務的研究の成果でもある。この桜は現在神戸の旧笹部邸のほか、「通り抜け」にもあるが、池上本門寺にも30本植えられた。そして嬉しいことに多摩森林科学園にも3本植えられていた。



(植えたばかりの笹部桜…2003年)

★笹部さんの交友録から

笹部さんが桜人生を決心するまでには、ちょっとしたエピソードが隠されている。「万葉和歌集この方些かの流行^{はやり}すたりがなく、日本人の心を打ち続けたものは桜ではないか」と考えたこの人の桜への傾倒は、とにかく方々の桜を見て歩き、手当たり次第に写真に撮ることから始まった。そんな学生時代の明治41年のこと、講義の合間に大学の校内で三脚を据えている笹部さんの背中を叩いた初老の紳士がいた。

「今日も相変わらずやってるネ、君は一体桜が好きなのか、それとも写真が好きなのか？」

「エエ、桜も好きだし、写真も好きです」

「見たところ君は法科の学生らしいが、そんなに桜が好きなら農学部へ入ったらどうだネ、その方が早道じゃないかネ」

「法科にいて桜をやったっていいでしょう」

と愛嬌のない返事で別れたが、その後暫く経って再びこの紳士と言葉を交わしたとき、

「君は愉快的なことを言う人だ。君の言う通り今の法科は全くつまらないところだ。君一度ボクの部屋へ遊びに来たまえ」

これまでは大学校内の付属病院に勤めている人ぐらいに軽く考えていたが、ふと、

「貴方はどなたですか？」

と聞いてみると、

「和田垣だよ」

と言われてビックリした。

当時経済学者というよりは英語学者として、また、シャレのヴェテラン奇行の人として新聞雑誌を賑わわせていた法科の名物教授、和田垣謙三博士だと分かった。こんなことがきっかけで和田垣教授の研究室に通うようになり、ざっくばらんで人間味豊かなこの先生から薫陶を受け、あるときこんな激励の言葉を頂いたのであった。

「君の桜も所詮一介のアマチュアではつまらないな。どうせ生涯を賭けてやるなら日本一になってくれよ。桜の神様になってくれ給え。和田垣はあてにして待っているよ」

この和田垣先生の激励の言葉が、笹部さんの桜への決意をさらに強く固めさせたのは確かなことである。

笹部新太郎自叙伝ともいうべき「桜男行状」には、桜をご縁にこの人と琴線に触れる交際を続けた個性豊かな人物が次から次へと登場して読者を飽きさせない。明治以来市民に愛されてきた伝統の「通り抜け」を守って、その管理指導を笹部さんに依頼した大阪造幣局長入間野武雄氏、岐阜県根尾村の「淡墨^{うすずみ}の桜」を守るためお寺まで建立し自ら僧侶

となった宮脇留之助氏、接ぎ木の名人で笹部さんに秘伝と名刀「千代鶴これひで是秀」を教えた平尾彦太郎翁、日本画家で「桜男行状」の装丁を飾った菅楯彦画伯すがたてひこなどなど……。

ところで、小林秀雄さんとのドラマチックな出会いを是非ご紹介しておきたい。日本における近代文芸評論の創始者として高名な仏文学者、あの太平洋戦争下で「モーツァルト論」を書き、1952年には「ゴッホの手紙」、1958年には「近代絵画」を著して近代芸術の精髓に迫ったあの小林秀雄さんを笹部さんの処へ案内したのは、文藝春秋の薄井恭一さんであった。巨星の激突する1963年の劇的な出会いを、薄井さんのお話から再現してみよう。

事の起こりは作家大佛次郎氏が神奈川新聞に書いた随筆である。「鎌倉に桜が咲き始めたが、多くはソメイヨシノだ。これがヤマザクラであったならもっと美しいのに」といった趣旨のもので、これに呼応して「ソメイヨシノでも十分に美しいと思われる」という小林秀雄氏の随筆が掲載された。小林さんはその後「桜男行状」に限らず、笹部さんの書かれた本を読んでソメイヨシノとヤマザクラとの差にも気付かれ、笹部さんに興味を持たれたのだろう。ある日文藝春秋かんぽやしの上林常務（のちの社長）から「小林さんを笹部さんのところに案内してんか」という命令によって、東京駅の新幹線のホームで小林さんを待ち受け、神戸の笹部邸にご案内した。

挨拶もそこそこに笹部さんの長広舌が始まった。環状線を目的地の反対へ行くような話ぶりが特徴で、それでいて話はチャンと首尾一貫しているのである。約2時間かあるいはもっとだったか、小林さんはただ頷くだけで終始無言、熱心に笹部さんの話に耳を傾けておられた。一段落してかぶとやま甲山裾にある「播半はりはん」で食事宿泊の予定で出掛けた。笹部さんを主賓とし播半の女将、そして小林センセの大ファンの若女将も席に侍した。いつも美味しい播半の食事がそのときはまた格別で、酒は無論ダントツである。お酒が入ると、小林さんは一変した。

笹部さんのボヤキ（桜に対する努力が労多く功少なきを嘆かれたと思う）の続きが始まると、「何言ってるんだい。一生好きなことを思いのままにやってきたんじゃないか。何を悔やむことがあるんだ！」と一喝なされた。笹部さんはキョトンとされて、「これア、播半まで叱られにきたんか」と言われた。しかし、すぐに気を取り直されて清談を続けられた。後に「小林さんの言う通りや、何の悔やむことがある」と老女将にも述懐され、また笹部さんはこれでたいへん気分が楽になったと言われたと聞いた。

その後小林秀雄さんは「桜男行状」を桜の聖書と激賞し、宇野千代さんを初め、多くの人々がこれに共鳴した。

笹部さんから教えられて小林さんは岐阜県根尾村の淡墨の桜を宇野さんに紹介し、淡墨

の桜に深い愛着を抱いた宇野千代さんは枯死寸前の桜の救援に立ち上がり、平野知事を初め多くの人々を動かして、この桜は見事に蘇った。

継体天皇お手植えと伝えられる淡墨の桜は樹齢 1500 年のウバヒガンザクラ、その幹には長い間風雪に耐えてきた年輪が刻み込まれており、凄まじいばかりの風格でここを訪れる人に歴史の持つ重みを教えている。この巨桜に^{かしず}傳くように咲いているヤマザクラは、戦前笹部さんが贈ったものである。



(根尾村の淡墨桜…1991 年撮影)

ボヤキ通した桜男笹部新太郎さんは、1978 年老衰のため自宅で亡くなられた。91 才であった。笹部さんの集めた桜に関する資料は、西宮市の白鹿記念酒造博物館に保管され、毎年 4 月には「笹部サクラコレクション展」が開かれている。「日本の桜は滅びるぞ！」と叫び続けた笹部さんの生涯は、決して本人が自嘲するほど軽いものではなかった。この人が与えた有形無形の影響は実に多くの人々に桜に対する認識を改めさせ、「綺麗な桜を守らねば」という気持ちを奮い起こさせている。笹部さんが口を極めてその無為無策を非難したお役所とても、決して無策ではおられなかった。笹部さんをご存じなかったようだが、1966 年高尾山麓の国有地には日本古来の名桜を保存する「浅川実験林」が創設された。爾来 42 年、ここに植えられた 250 種 2000 本の桜も立派に育ち、今は「多摩森林科学園」と

して公開され、多くの人々の心を慰めている。

(完)